

※ここからお届けするのは、ユズちゃんを書いた小説……のような何かです。あろうことが新人賞に応募したようですが、文字数の規定などを大きく逸脱しているため余裕で落選しました。

ご了承の上で読み進めてくださいませ。

ヘルハデス・レコード
冥終黙示録〜輪廻を外れし咎人どもの宿業〜
カルマ

著者…ユズ P N…夜叉竜滅
やじやろうめつほつび

登場人物

我…現世では『ユズ』という偽りの仮面コード・ネームで生きているが、真名は違う。
理を超越した魔族である我の真名は『夜叉竜滅』。

- ・全ての時空・並行世界の頂点に立つ『終極の霸王』
オーバー・ロード
- ・固有武器は『黒翼の審判アグレアⅡナハト』↑黒い双剣
- ・白皙の肌にしなやかな手足。長身瘦躯(あと乳がでかい)
- ・不揃いな双眸のうち、深紅の方は『神滅の魔眼・零式』
オッド・アイ しんめつ まがん ぜろしき

・羽織っているのはマントではなく『ティアマント黒龍の飛翔』

・前世からの絆で結ばれた眷属がいる(現世では兄)

眷属：現世では『ユズ』のおにいちゃん。だが実際は、魔族である我の忠実な下僕にして眷属。困ったことに、我に思いを寄せている。

・一見軟弱だが、我のために身を投げ出せる男らしさを持っている

・その優しさは異能『クラウン・スフェルディア愚者の気まぐれ』の名を持つ。

・我と絆の血色鎖ブラッディ・チェーンで結ばれている。赤い糸などより強固なため、

我らの絆は冥府だろうと来世だろうと絶たれることはない。

(編集さんへ 終章からなのは仕様です。我の物語に始まりなど不要……その気概を汲み取るがよい)

終章..黎明に寄り添いて

静寂だけが、心地いい。

天使の喇叭も悪魔の凱歌も、消えうせて。

ひたすらに凧いだ空気が、私の頬を撫でる。

「……終わった、か」

長く険しい最終戦争に終止符を打ったのは、『終極の覇王』たる我

ラグナロク

だ。神をも屠る二対の黒剣『黒翼の審判アグレアーナハト』を振るい、闇を祓い、光を陰らせ。

希望と絶望に縛られた、腐敗せし秩序を断ち切ったのだ。

「我はこの戦いを忘れない……失われた命を、二度と還らぬ魂を。全てを背負い、世界を統べる。支配者としての業を果たすために、この命を使おう」

呪われた運命に思い馳せ、瞳を伝うのはなんだ？ 涙などとうに涸れたはずなのに。どうして胸が苦しいのか。

勝利の美酒に酔いしれることすら、我には許されないのか？

「終焉は美しく、また儚い……無限の虚無は、宿業への罰か……」

そう呟いた私の肩に、そっと手が置かれた。

地上にはもう、私の他に一人しか存在していない。

そう、我と運命の鎖で繋がれた、奴だ。

「眷属……なんだ、我に軽々しく触れるな」

現世では私の兄として生まれてきた、『フラグメント・オブ・ゼーレ魂の片割れ』だ。

流石は私の片翼と言うべきか、最終戦争を生き残り今もここにいます。そして、今は亡き太陽よりも眩い笑顔で、我にこう言った。

ユズ、うちに帰ろう。

「む……私はユズではない。だが、まあ……そうだな。これから我と汝しかないのだし……不服だが、共に生きるのが道理だろう。さて……まずは新たな人類を増やすべく、受胎の儀に励もうか。いや、私は望んでないのだがな？　汝がそういう眼をしているからな？」

そう、私はそんなこと欠片たりとて望んでいない。だがまあ、それ以外に娯楽もないことだし……眷属に悪感情を持ち合わせているわけでもない。

魔族である我だが、アダムとイブの真似事をするのも悪くないだろう。どうせこの男は、我なしでは生きていけぬのだからな！

そうして我らは、人類の祖となった。子孫を軽く八兆人こしらえた我らは神話となり、いつまでも傍らに寄り添って生涯を終えた。

そして後世に語り継がれし我らの神話、それを記した書物こそ。

——『冥焉黙示録』である。

了

（この作品は落選してしまったが、年齢が余りにも若いことと独特なセンスを買われ、編集者が興味を持ったようだ。そうしていくつかのインタビューが行われた……その一部を抜粋しよう）

Q・もしもらえたら、賞金の使い道は？

A・うむ……眷属が欲するものを与えるだろうな。それで笑顔になってくれたのなら、僥倖である。